

[青山学院大学]

キャンパスを見守り続けるイチョウ並木

青山学院大学 政策・企画部 大学広報課

1 青山キャンパス

イチョウ並木の歴史

青山キャンパスの正門から間島記念館へと続く、青山学院を象徴するイチョウ並木は、1926年に整備されたものである。1923年の関東大震災で本学は甚大な被害を蒙ったが、復興計画のもと現在の大学1号館と2号館が建てられ、青山学院第5代石坂正信院長の案により、イチョウの苗木も植えられた。苗木は、当時の中学部の生徒たちと教職員の寄付によって買入れられた。

その後の第二次世界大戦による空襲で、イチョウ並木も被害を受けたが、1947年、中学部の父兄会からの援助によって緑化運動を開始し、再び元の姿へ

と蘇った。戦後の混乱期にあっても、自然と調和した学びの場を取り戻そうとする教職員や保護者の思いが、再生に結実したのである。

そして今もなお、青山キャンパスのメインストリートは本学のシンボルであり、秋には鮮やかに色づいたイチョウ並木が訪問者を迎えている。

また、青山学院創立100周年にあたる1974年10月に制定された校歌の一番の歌詞にも、「忘れじ緑の銀杏の並木」というフレーズが登場する。これは、イチョウ並木が単なる景観ではなく、青山学院の歴史と精神を象徴する存在であることを物語っている。

2 大学公認キャラクター「銀ニャン」

2012年には、ゆるキャラ「銀ニャン」が誕生した。銀杏の実をモチーフにした猫のキャラクターで、学生たちの創造力と愛校心が形となった存在である。

また、「銀ニャンフェス」というイベントでは、本学の学生が中心となり、学生らが構内で拾った銀杏を学生食堂や青山キャンパス周辺の飲食店に提供し、メニューに加えていただくという活動も行った。匂いなどの理由か

ら敬遠されていた銀杏を地産地消の食材としてとらえる
学生の発想が光った。

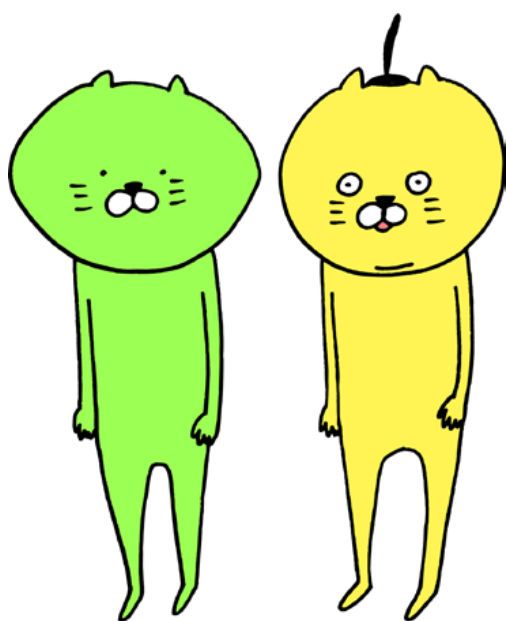
そのほか、グッズやLINEスタンプなども制作され、
学内外で人気を集めている。

さらに、青山学院創立150周年を記念して、2024年にはこの青山キャンパスの歴史を象徴するイチヨウの葉を集めて抽出した染液を使い、今治産のタオルを染めた黄色いハンカチ「青山の銀杏染めタオルハンカチ」が製作・販売された。この記念グッズは、イチヨウ並木の美しさと歴史を日常の中で感じられるアイテムとして、多くの学生や卒業生に親しまれている。

3 青山学院の歴史と精神を体現するメインストリート

たくさんのイチヨウの木が植えられた本学のメインストリートは、現在も学生たちをはじめ、多くの方々に親しまれている。四季の移ろいを感じながら、学生・教職員といった本学の構成員と校舎をつなぐ場所であり、青山キャンパスの中心地、学生たちの憩いの場所であるとともに、卒業生にとっては思い出が詰まった帰郷の道でもある。メインストリートのイチヨウ並木は、単なる景

観としてでなく、青山学院の歴史と精神を体現する存在として、今も静かに私たちに語りかけている。



公認キャラクター「銀ニャン」



青山キャンパスのメインストリート

[広島修道大学]

紡ぐ繋ぐハーモニーロード —個性が奏でる美しいハーモニー—

吉田 輝美 広島修道大学事務局長兼財務部長

1 歴史と経緯

学校法人修道学園は、1725（享保10）年、広島藩五代藩主浅野吉長が藩校「講学所」を開設したことを淵源とし、今年で創始300周年を迎える。原子爆弾の壊滅的被害からの復興や学制改革等を経て現在に至り、広島経済界の強力な支援の下、7学部4研究科を擁する広島修道大学、修道中学・高等学校及び広島修道大学ひろしま協創中学・高等学校を設置している。

1974（昭和49）年、広島修道大学は広島市中心部（観音キャンパス）から現在の西風新都地区（沼田キャンパス）へと総合移転を果たす。当時は公共交通機関も充分に整備されていなかったため、通学手段としてバス運行会社と特定契約を締結し、スクールバスを運行させていた。

1994（平成6）年、本学に隣接する広島広域公園内で「第12回アジア競技大会広島1994」が開催されることになり、交通インフラとして広島市中心部と会場を結ぶ新交通システム「アストラムライン」が开通了。そして同年9月、スクールバスの全4路線はその役目を終了した。

2 キャンパスデザインの先駆け

アストラムラインの開通前、アストラムライン終点の修道大学前駅舎予定地からキャンパス中心部までの全長約350mの既設道は鬱蒼とした木々に覆われた幅員11mの車道で、徒歩による通学には適していなかった。そのため、総工費7億5600万円という大規模な中央道路整備・植栽工事が計画された。既設道を7～8mに減幅し、新たに8mの歩道を造成、グリーンベルトを設けて歩車分離を完成させ、樹高12～14m、幹周1～1.4mのイチヨウ52本を歩道沿いに2列に配しイチヨウ並木とした。周辺にはクスノキ、タブノキ、カシ、モミジなど27

種類の中高木約800本を植え、キリシマツツジ、西洋シヤクナゲなどの低木、モスフロックス（芝桜）・マツバギクなどの地被類^{ちひるい}を広範囲に配して景観を整えた。歩道は「備前焼」による特殊レンガを特注で製造し、通学の足元を彩った。それまで無頓着だった大学の「表玄関」に新風を吹き込んだのである。

3 ハーモニーロード

1994（平成6）年10月28日、正門から本館前まで続くイチヨウ並木の中央道路が完成し、沼田キャンパス20周年記念式典にて、中央道路の愛称を「ハーモニーロード」とした。本学商学部2年生の発案であり、沼田の地に集うさまざまな個性、これらの個性が奏でる美しいハーモニーの象徴として名付けられた。

本学の建学の精神は、古典の一つ『中庸』の「天命之謂性 率性之謂道 修道之謂教」に由来する。これは「人間にはそれぞれの天性がある。天性を伸ばすのが人間の道である。その道をしっかりとしたものに整えるのが教育である」という意味である。学生一人一人の個性を育んでいく建学の精神は、ハーモニーロードにも息付いている。

4 記念碑と季節の移ろい

ハーモニーロードには、様々な記念碑が設置されている。本館前に故田中好一理事長胸像、体育館前に第12回アジア競技大会記念碑及びハーモニーロード中央には本学卒業生である吉田拓郎氏の歌碑がある。また、完成翌年には広島市「ひろしま街づくりデザイン賞」の緑化推進部門に選出されている。

最後に特筆すべきは、イチヨウ並木、その四季折々の自然の美しさである。春には新芽が活き活きと芽吹き新学期の始まりを予感させ、夏には直射日光を木漏れ日に和らげて一瞬の涼を与え、秋には天も地も黄金に染め、冬には深々とした白銀の世界に溶け込んでいく。表情豊かに変化するイチヨウ並木は、幾年も巡りゆく学生たちの姿を見守り続けているのである。



ハーモニーロードの銀杏並木

[武蔵野大学]

苗木から育てた銀杏並木

伊藤 泰彦 武蔵野大学学生部長・工学部教授

はじめに

本学武蔵野キャンパスには、正門から続く、学祖の雅号を冠した雪頂講堂へと向かう銀杏並木がある。銀杏の樹々は、春には新緑の青葉が瑞々しさを醸し、夏には暑さを和らぐ緑陰空間をつくり、秋には黄金色の彩りを演出し、冬は陽だまりを生み出す。秋は、黄金色に染まった枝木の葉、直後に訪れる落ち葉の絨毯がとても綺麗だ。スマホで撮影する学生たちの姿も見られ、微笑ましく思う。

1 緑豊かな武蔵野キャンパスと銀杏並木の経緯

本学の前身「武蔵野女子学院」は、関東大震災の翌年19

24年に、築地本願寺の境内で創設された。その5年後、1929年に保谷村（現・西東京市新町）に移転した。この地が、銀杏並木のある本学武蔵野キャンパスである。今は立派な樹々が林立する環境だが、キャンパス内の案内板には、「当時は、一面『茅萱（チガヤ）』の原野であったその中に山桑が二本だけはえていたそうである」との記述がある。「武蔵野女子学院五十年史」（1974年編）には、2代学院長・鷹谷俊之先生の回想録がある。保谷移転前の1926年、築地から遠足をして、黒松苗2500本を植えたことに始まり、創立10周年の1934年、医師・富永置三氏より藤28本と銀杏苗31本が寄贈され、銀杏は道の両側に植えたと紹介している。銀杏並木は、本学が小さな苗木から育んできたのである。

2 原風景と当初のキャンパス計画から並木道を振り返る

キャンパス周辺の原風景を辿ってみる。この地は、八代將軍徳川吉宗の享保の改革により、1724年から上保谷新田として開発（1736年に検地）された歴史を持つ。キャンパス南東の正門は、五日市街道と玉川上水の分流・千川上水に接している。そのいずれも、江戸の

発展を支えるインフラである。上保谷新田は、五日市街道沿いの路村と上保谷村の散居村の特徴が混在した地域のように、本学キャンパスはちょうどその境界に位置している（「新座郡上保谷新田絵図」1869年9月、小平市立図書館所蔵）。つまり、前述の「一面茅葺の原野」は、何もない更地ではなく、近世江戸の生活を支える水利と生業を礎にした、恵みの土地なのである。

その地を得た本学が、キャンパスの未来像を当時どう描いたのか考える。このキャンパスの計画図面として、1927年作図の「武蔵野女子大学建築設計図」が残る。その図には、設計者に菅原栄蔵、顧問に伊東忠太の名が記されている。伊東忠太は、法隆寺の柱のむくりを古代ギリシャのエンタシスが伝播したものと唱え（「法隆寺建築論」1893年）、20世紀初めに世界一周の建築視察旅行を敢行した。その後、日本・西洋・アジア・イスラムなど多様なモチーフを用いた建築家として知られる。旧真宗信徒生命保険株式会社本館（現・本願寺伝道院、1912年）、旧東京商科大学（現・一橋大学）兼松講堂（1927年）、築地本願寺（1934年）などが、その例である。さて、先のキャンパス計画図だが、そのまま

には実現していない。計画の特徴を、正門から北西へ延びるアプローチと広場が作る中心性すると、正門から講堂へとキャンパス中央を貫く並木道が、その特徴を継承しているといえるのではないだろうか。

さて、あらためてキャンパスの樹々を眺めてみた。白檜・すだ椎・小檜・棕木・桜・楓・榎・黒松・赤松・大王松・ヒマラヤ杉・メタセコイヤ・ドイツ唐松・青桐・鈴懸の木・ユーカリ・楠・菩提樹・泰山木・椿・金木犀など多種多様。キャンパスの緑は、屋敷林・雑木林といった武蔵野の原風景、伊東忠太的な植栽の異文化混淆、建学の精神の縮図のようである。その中で、銀杏並木は、多様な立場や願いを繋ぎとめるキャンパスの基軸といえよう。本学は、昨年度創立100周年を迎えた。銀杏の根回りの整備などを施しながら、この銀杏の並木が次の100年に向けて保全されることを願っている。



紅葉の銀杏並木